



日本イスペインヤ学会

Asociación Japonesa de Hispanistas

会報第 17 号 / Boletín Núm.17

2010 年 10 月 20 日 / 20 de octubre de 2010

事務局

〒170-0004 東京都豊島区北大塚 3-21-10
ア-パ-ン大塚 3F (株) ガリレオ
学会業務情報化センター 東京オフィス内
Tel:03-5907-3750 Fax:03-5907-6364
e-mail:g004esp.mng@galileo.co.jp
ホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/ajh/>

広報委員会編集部

〒618-0024 京都市右京区西院笠目町 6
京都外国語大学外国語学部スペイン語学科
坂東省次研究室 Tel:075-322-6121
e-mail:s_bando@kufs.ac.jp

目次

巻頭言 寺崎英樹	2
ミゲル・デリーベス特集	
1. ミゲル・デリーベス氏の死を悼む 喜多延鷹	3
2. 追悼 ミゲル・デリーベス ーカスティージャ・イ・レオンの魂ー 豊原ひとみ	5
3. ミゲル・デリーベス『ネズミ』 (喜多延鷹訳、彩流社、2009 年) 丸田千花子	6
学会報告	
1. VII Congreso Internacional de la Asociación Asiática de Hispanistas Paula Letelier	8
2. 日本イスペインヤ学会における『ドン・ファン』劇評 (2009) 小阪知弘	9
エッセイ	
1. 「たまプラーザ駅」考 山下好孝	11
2. わがエルサルバドルの思い出ーインシンカ、サッカー戦争、ベネケ氏、 そしてインスタントコーヒー 木越勉	12
3. いわゆる「講読」の授業について 中井博康	13
4. 「M・デ・ウナムーノとの出会い」 齋藤康子	14
5. 東京スペイン語研究会の活動にみるスペイン語学研究動向 西村君代	16
自書紹介	
1. 『ウルトライスマー マドリードの前衛文学運動』 坂田幸子	18
2. <i>Castilla y el mundo feudal. Homenaje al profesor Julio Valdeón, I-III vols.,</i> Universidad de Valladolid, 2009. 大原志麻	19
3. 訳者のとまどい ロベルト・ボラーニュ『野生の探偵たち』 柳原孝敦、松本健二訳 (白水社、2010) 柳原孝敦	20
書評	
1. アンヘル・エステバン、ステファニー・パニチェリ『絆と権力 ガルシア＝ アルケスとカストロ』(野谷文昭訳、新潮社、2010 年) 石井登	21
新刊案内	22
編集後記	24

巻頭言

本年3月に行われた選挙で本学会理事に選出されたときは、10年ぶり3度目のことで、もう学会活動に関しては隠居気分でしただけに、意外ではありましたが、これが学会に対する最後の御奉公になるだろうと軽く考えていました。ところが、理事による会長選挙が行われ、一度に決着が着かずには紆余曲折があって、最終的には会長職に選任されるに至りました。現在の会則では一度理



寺崎 英樹

事に選ばれると、退任後4年間は被選挙権を失うので、選ばれる役員は近年若返りの傾向が続き、会長も最近是比较的若い中堅の有能な先生方が次々と就任していました。そこへ気力・知力・体力とも低下気味の無能な老人が座っては一挙に時代が逆戻りしてしまいます。どう考えても自分が適任とは思われないので、当初辞退を申し出ましたが、関係者からの熱心なお勧めがあり、それ以上人事が停滞するとかえって学会の活動に支障を来すことになりかねないと感じましたので、就任を決意しました。ただし、後に述べるような事情で、まだ会長見習いのような存在です。お引き受けする以上は能力の及ぶ限り努めるつもりですが、会員の皆様の御支援なしではとても重責を果たせません。正式決定の上はよろしく御協力をお願いします。

福嶋前会長は会長職は激務だから2年が限度と述べておられました。それだけ熱心に学会のため奉仕されたからこそその述懐でしょうが、実際に仕事を始めてみると、それがあながち誇張ではないことを早くも実感しています。このような事態は、かつては分離していた会長と理事長を一人で兼ねるようになったこと、以前に事務を委託していた団体の破綻後、資金管理を代表者である会長自身が行うことになったことなどに起因していると思われます。会長に就任してわかったことは、連日のように事務局や理事からメールで送られてくる事務の処理もさることながら、もっとも重要な任務は、実は振替口座の管理だということでした。貴重な会費をお預かりしている以上、当然と言えば当然ですが、要するに会長とは金庫番も兼任の学会庶務係であると悟られました。

些末なことばかり述べて、会長としての高邁な理念や抱負はないのかとお叱りを受けそうですが、今さら高い志を述べるのは少々場違いと思われるので、在任中に処理しなければならないと考えている具体的な問題のいくつかをお示しすることにします。ただし、これらはまだ個人的見解であり、理事会で議論を重ねた上で、会員にお諮りしなければならないと考えています。その第1は学会業務情報化システムの新規導入という問題です。これを導入すると、たとえば現在学会では2年ごとの理事選挙のためにかなり巨額の経費を支出していますが、オンライン選挙システムを利用することによって従来より短期間に比較的安い費用で選挙を行うことが可能となります。ただし、これには本人確認やセキュリティなどの問題があり、またメールを利用しない会員にはこれまで同様郵便による投票制度を保証しなければならないなど解決すべき問題もいくつか残っています。すでにこのシステムを導入した他学会の例なども参考にして現在理事会で検討を進めてもらっているところです。

その2は機関誌イスパニカの拡充と編集体制の強化という問題です。幸い会員による研究活動は非常に活発で、本年も例年以上に多数の投稿があったと聞いています。これは喜ばしいことですが、同時に大幅なページ数増などの措置を講じなければならないかもしれません。現在は審査が行われている段階ですが、機関誌発行は大会と並んで学会の主要な事業ですか

ら、できるだけ充実を図って行きたいと考えています。これに関連して考慮しなければならないのは、現在の査読制をいかに維持して行くかという問題です。学会の研究水準を維持し、審査の公平性を保つために査読は欠かせないものですが、編集委員会が最近もっとも苦労しているのは査読者の確保ということです。学会活動は完全なヴォランティア精神によって成り立っていますが、どこの大学でも近年教員は業務が増えて多忙を極める中、時間と頭を使う査読を引き受けてくれる適任者を探すのは容易ではないと聞いています。こうした状況を少しでも打開するため、査読者には気持ちだけでも査読料を払ったらどうかという意見も出ています。こうしたことも真剣に検討しなければならない段階に来ていると思われます。

次に、自分が就任することになって気付いた会則上の問題があります。この会報を見て、初めて会長が替わったことを知った会員も少なくないのではないのでしょうか。理事選挙の結果は郵送により通知されましたが、会長選挙の結果はまだ通知されていません。すでに学会ホームページでは役員交代が公表されていますが、ホームページを定期的にチェックしている会員は多くないはず。このような事態は会則に原因があります。現行会則第9条の規定によれば、「会長は理事の互選とする。会長は総会においてこれを承認する。」とあります。この規定に基づき、会長は4月に理事の互選により選出されましたが、まだ総会による承認は受けてはいません。つまり、事実上会長は業務を遂行していますが、本年10月末関西大学で開催される学会総会で承認されるまでは正式の会長ではないことになります。これは会則の不備であると言わざるを得ません。かつては会長と理事長が分離しており、選び方が異なっていました。しかし2002年の会則改正により会長が代表理事を兼ねる制度が発足するとともに、二つの選び方を足したような現行規定ができました。これにより会長選挙から総会までの約半年間は会長・代表理事が暫定的であるような変則状態が毎回生じているわけです。これは単に形式上の問題ではなく、対外的にも預貯金口座の管理上からも困った問題を引き起こしています。この不都合を解消するには実態に合わせて会則を改正するしかないと考えます。

最後に、学会はこれまでと同様スペイン語およびスペイン語圏にかかわる言語、文学、文化などの諸分野について研究活動を促進するため活動するのは当然のことですが、社会で英語の一極集中が進む中、大学、高校等における外国語教育、とりわけスペイン語教育の目的やあり方を見直すとともに、従来以上に教育法についての研究活動を重視すべきだろうと考えます。こうしたことについて会員の皆様からの積極的な働きかけと協力を期待します。

(てらさき・ひでき 神奈川大学)

【ミゲル・デリーベス特集1】

ミゲル・デリーベス氏の死を悼む

喜多 延麿

ミゲル・デリーベス氏最後の傑作となった「異端者」(1998)が出版されたころ、氏の結腸にガンが見付かり、病状は一進一退していたが、2010年3月12日ついに氏は不帰の客となった。享年89歳。ここにデリーベス氏を追悼し、小説家、新聞人、画家、狩猟家、環境保護主義者であった、氏の業績を辿ってみたい。

デリーベス氏は20の長編小説を書き、多数の短編小説、戯曲、随筆、旅行記等を発表し、スペインでは、知らぬ者のない有名な文筆家である。ナダル賞を受賞した「糸杉の影は長い」(1948)を始めとし、「エル・カミーノ(道)」(1950)「赤い紙」(1959)「ネズミ」(1962)「マ

リオとの五時間」(1966)「無垢なる聖人」(1981)「異端者」等は百万から二百万部にも達する勢いでロングセラーを続けている。伝統の写実主義を基に独自の細密な描写、構成法により、カスティリャ地方に生きる男、子供、家庭、自然、死生観を、厳しくも優しい目で書き新境地を開いた。

氏は1940年、マンガ家として北カスティリャ新聞社に入社したが、入社後は、映画、サッカー、社会、コラム記事なども書き、編集長を経て1958年社長となり、1963年検閲との軋轢で職を辞した。「好色六十路の恋文」(1983)「マリオとの五時間」「一ペセタの電車賃」(1957)に新聞社の仕事の態様が覗える。当時の婚約者、後に夫人となったアンヘレスさんは、マンガよりデリーベスの書く新聞記事に文才を発見し、小説を書くよう勧め、これがナダル賞受賞へと繋がっていく。文章については、新聞社に勤めながら通った商科大学で商法の講義を聴いたホアキン・ガリーグス先生から、無駄のない、端正で、正確な文章作法を学んだ、としている。

同時に、美術学校にも通った。余技に、先生や仲間たちの似顔絵を描いて人気者になった。新聞社入社当時は、マンガ、挿絵、イラストなどを描いた。画家をモデルにした小説「灰地に赤の夫人像」(1991)を書いている。「ネズミ」の最初のページには、氏自身の筆により、この小説の背景となる村の景色が絵地図にして示してある。「芸術の表現は、生活の環境による」とは氏の持論で、「自分はたまたま小説家になったが、小説家にならなければ、画家になったかもしれない」と言っている。

大学教授だった父の趣味は狩猟だった。日曜日になると、子供たちを連れて山野を駆け巡った。父の影響で、デリーベスも狩猟家になった。氏の狩猟は、一対一の真剣なスポーツであり、無用の殺戮、乱獲、密猟を戒めた。氏の小説には、狩猟の場面が多いが、「猟人日記」(1955)は、スペイン語の豊饒性を広げたとして、国民文学賞を受賞している。「私は狩猟をする作家ではなく、小説も書く狩猟家である。私の作品は野山との接触から生ずるものであり、山に猟に出かけて獲物を獲るのと同じ過程で本も書くのである」と述べている。氏の作品は、自然と鳥獣が渾然一体化している。エミリオ・サルセド氏は、「デリーベスの大地は生き物であり、読者はその鼓動を聴診する目が必要である。景色は鮮やかで、生きとし生けるものの感情が息づいている」と讃えている。その自然が、人間により、段々と侵されて変異していくのを見るにつけ、心を痛め、自然環境保護主義者として、社会に警鐘を鳴らすようになった。1973年、氏は王立言語アカデミヤ(学士院)会員に推挙されるが、1975年の学士院入会演説で、「自然はSOSを叫んでいる。科学、産業、経済の発展は自然を犠牲にしてきた。今すぐ自然との調和を図らねば、人類は自殺への道を歩くことになる」と警告し、自然保護を訴えることに終始した。失われてゆく自然の危機を早くから、鳥獣の目線で実感していた。昨年までEU外交代表を務めたソラナ氏は「デリーベスはスペイン最高の環境保護主義者」と評した。

外国からの賞を含め多くの文学賞を受賞し、功成名遂げた作家だったが、ただ一つ、有力視されていたノーベル賞受賞の機会がなくなったのは残念なことである。デリーベスの死はスペイン・世界の文学界にとって大きな損失である。

前記の学士院入会演説草稿を書いていた1974年、氏はアンヘレス夫人を脳腫瘍で亡くした。「灰地に赤の夫人像」では、夫人は入会(但し小説では美術アカデミヤ)演説のテーマ、展開などを心配してくれた、ことになっている。夫人は、氏の書く小説の最初の読者であり、的確な助言をし、講演旅行に同行し、秘書役を務め、外人との会話には、通訳を務めた。学

士院入会演説の冒頭、氏は、自分の文学は夫人に負うところが大きかったと述べ、聴衆の前で亡き夫人に感謝した。

今頃は、婦人との再会を果たし、尽きない語り合いをしておられるのではないだろうか。デリーベス氏のみ霊の安らかならんことをお祈りしたい。

(きた・のぶたか 和光大学)

【ミゲル・デリーベス特集2】

追悼 ミゲル・デリーベス ―カスティーリャ・イ・レオンの魂―

豊原 ひとみ

2010年3月12日、春休みを利用してサラマンカに滞在していた最中、約120キロ離れているバジャドリーでデリーベスが89歳で逝去された。約15000人の人々が最後のお別れを告げにバジャドリー市役所の遺体仮安置所へ訪れ、街は悲しみに包まれていた。報道によると、長年、直腸癌を患って衰弱していたほか、妻が1974年に先立って以来、あの世へ逝くことを望んでいたという。

デリーベスはカミロ・ホセ・セラやカルメン・ラフォーレとともに40年代から活躍し、内戦後のスペイン文学を開花させた作家のひとりである。1920年にバジャドリーに生まれ、内戦勃発のため学業を続けることができず、叔父が経営する新聞社 *El Norte de Castilla* の戯画家（ニックネームは *Max*）として働く一方、文学活動を行っていた。言論弾圧により編集スタッフが追放され、デリーベスは編集にも携わり編集長にまで至ったが、検閲に絶えず悩まされ、1966年の *Ley de prensa* が発布される3年前に辞職した。その後、本格的に作家として活動し始め、フランコ独裁社会における悲惨な現実を作品で悲観的に表した。デリーベスの文学的な才能を見抜いた妻が突然亡くなり悲嘆に明け暮れたが、作品を描き続け、絶大な評価を得た。王立アカデミーのメンバーとして選出されたほか、ナダール賞、アストゥリアス皇太子賞、セルバンテス賞という数々の名誉ある賞を受賞している。最後の賞としては、2009年11月、自宅で療養中に獲得した *Medalla de Oro de Castilla y León* である。小説のなかにはテレビでドラマ化されたり、映画に脚色されて好評を博した作品もある。これまで日本語に翻訳されているデリーベスの作品は『好色六十路の恋文』（喜多延鷹、西和書林、1989）、『赤い紙』（岩根圀和、彩流社、1994）、『灰地に赤の夫人像』（喜多延鷹、彩流社、1995）、『エル・カミーノ（道）』（喜多延鷹、彩流社、2000）、『異端者』（岩根圀和、彩流社、2002）、『マリオとの五時間』（岩根圀和、彩流社、2004）、『ネズミ』（喜多延鷹、彩流社、2009）の7作品である。

デリーベスの作品を改めて読んで認識するのは、特にカスティーリャ・イ・レオンという土地・環境への愛着を通じて自然への愛情を表現していることである。特に *Viajes historias de Castilla la Vieja* (1964)、*Castilla habla* (1986)、*Castilla en mi obra* (1972)、*Castilla, lo castellano y los castellanos* (1979) ではカスティーリャ・イ・レオンへの想いが明瞭に表されている。確かに、例えば *Diario de un emigrante* (1958) ではチリの首都サンティアゴ、また *Los santos inocentes* (1981) ではエストレマドゥーラが中心になっているが、ほとんどの作品の舞台は基本的にカスティーリャ・イ・レオンに焦点が当てられている。デリーベスが描いたカスティーリャ・イ・レオンはアソリンやウナムーノという98年世代の作家たちが重きを置いて描いた風景描写とは異なる。デリーベスは98年世代の作家たちのようなスペインのアイデンティティを風景のなかに模索し、過去の栄光を投影して描写しているのではなく、貧

しく過酷なカスティーリャ・イ・レオンの風景をありのまま写實的に描いている。そして同時に、デリーベスはカスティーリャ・イ・レオンに住む人々の日常生活や伝統も克明に描いている。また、デリーベスが作品で使っているスペイン語に着目すると、郊外特有の言葉がそのまま使用されており、辞書に見当たらない単語もある。さらには、作中人物についてあだ名を付けて呼んでいるため、郊外特有の言葉とともに実際の場の雰囲気や物語世界で再現されている。デリーベスがカスティーリャ・イ・レオンに焦点を置いて描いたのは、フランコ独裁主義による社会形成を通じて人間を画一化させた都会に対して批判的精神を示しており、地方第一主義を掲げて人間の本質を自然と郊外のなかに探していたからだと考えられる。デリーベスにとって、都会に対して存在する郊外の生活においてこそ、真の人間が存在している。

また、デリーベスは *Diario de un cazador* (1955) を発端に、狩猟を題材にして沢山の作品 *La caza de la perdiz roja* (1963), *El libro de la caza menor* (1966), *Con la escopeta al hombro* (1970), *Alegrías de la Caza* (1977), *Aventuras, venturas y desventuras de un cazador a robo* (1978) を描くなかで、人間と自然の間の共存、調和、敬意という人間と自然のあいだの不可欠な関係を提示している。デリーベスは狩猟の愛好家として知られているが、作品を通じて分かるのは、デリーベスにとって狩猟とは商品価値の高い資材の獲得を目的としているのではなく、あくまでも人間と自然の触れ合いと念頭に置いており、人間が自然のなかで自らの判断力や知識を試し、自然と交流することを目的とした娯楽の狩猟を意味する。1972 年にはストックホルムにおける人類環境保護会議で *La caza de España* という題目のエッセイを公開し、種の絶滅や生息地の消滅からスペインの環境危機を訴えた。環境保護に対するデリーベスの積極的な姿勢は 2008 年にサラマンカ大学から「自然環境の保護者」として名誉博士号を受賞することに繋がった。生物学者の息子ミゲル・デリーベス・カストロと共作した最後の作品 *La tierra herida* (2005) ではオゾン層の破壊をはじめ、地球の環境問題について本格的に分析している。このように、出生地カスティーリャ・イ・レオンへの愛着を通じて自然に対する愛情、関心がデリーベスのなかでますます深まっていったことが分かる。

デリーベスがよく散歩で訪れたというバジャドリーの公園 Parque del Campo Grande を数年前に私が初めて訪れたとき真っ先に感じたのは、自然と一体化した空間の存在であった。そこでデリーベスは自然を身近に感じ、自然と交感していたのだろう。作家だけでなく、環境保護者としても活躍したデリーベスの精神を彼の作品を通じて今後も考え続けていきたい。

(とよはら・ひとみ 関西外国語大学)

【ミゲル・デリーベス特集 3】

ミゲル・デリーベス『ネズミ』(喜多延鷹訳、彩流社、2009 年)

丸田 千花子

今年 3 月に亡くなったミゲル・デリーベスの『ネズミ』(1962) が喜多延鷹氏の手によって翻訳出版された。本書は 1962 年度のスเปน批評家賞を受賞し、デリーベスは政府や出版社が主催する文学賞ではないこの賞の受賞を大変喜んだ。というのもカスティーリャ地方のある寒村での人々の生活を描いた社会派の写実主義小説である本書は、まさにフランコ時代の検閲制度の結果生まれた小説といっても過言ではないからだ。訳者が「解説」で述べているように、デリーベスは、カスティーリャ地方の農村の荒廃ぶりを告発するキャンペーン記事を当時勤務していたノルテ・デ・カスティーリャ新聞社に書こうとしたが、検閲当局から度

重なる記事の訂正を要求された。新聞で告発する場を奪われたデリーベスは、生まれ育った地方の貧しさを看過できず、告発の場を小説に変えて発表したのが本書だった。スペインではフランコ政権が国際社会に復帰した1950年代半ば以後、経済発展をとげたが、執筆を開始した1959年当時のカスティーリャ地方の農村はその恩恵にあずかれず、水道や電話線、さらに電気もひかれていない農村もあったという。そしてデリーベスはこの現況を象徴するような人物にセゴビアで偶然出会う。ネズミを捕り、売り歩く『ネズミ捕り』の男性だった。デリーベスはこの男性をモデルにして、本書の『ネズミ捕り』おじさんを描いたと述べている。

このように本書の舞台はデリーベスによるところの進歩から取り残されたカスティーリャ地方の寒村であり、主人公はその村のはずれの洞穴で暮らす『ネズミ捕り』おじさんとその息子ニーニである。ネズミを捕獲し、食用として村人に売って生計を立てながら、原始的な洞穴生活を送る無骨で無教養の『ネズミ捕り』おじさんは、ともすれば村人から孤立するところだが、両者の関係を繋ぎとめているのが少年ニーニの博識と人柄である。異父兄妹を両親にもち、さらに父方母方の祖父2人も兄弟同士であるという二重の近親婚の結果生まれたニーニは、自然が生みだした奇跡のような存在である。ニーニは学校に通学せずとも、厳しい自然の中で生きていく上で必要な知識を老人たちから学び、正義感にあふれ、どのような状況にあっても親切心と冷静さをもち、ときにはひどい仕打ちにも耐えた。その博識と人柄ゆえ、ニーニは村人からも一目置かれ、信頼すらされている。しかしこの父子の貧しいながらも平穏な洞穴生活は当局の方針で脅かされることになる。スペインを訪れる外国人観光客の手前、洞穴で暮らす国民の存在は国のイメージ・ダウンにつながるという理由で洞穴からの退去命令が出されたからだ。しかし『ネズミ捕り』おじさんは洞穴を退去する代わりに新居と仕事を提供するという交換条件を文明社会の一員になることだと考え、これを拒絶する。社会からの圧力が父子の生活を脅かす一方、自然界も父子に難題をつきつける。父子の生活の糧であるネズミが自然の摂理により減少し、ついには捕獲できなくなるのだ。しかし自然現象を理解できない父は、原因を隣町から趣味でネズミを捕獲しにきた若者のせいにし、さらに出合い頭に若者を殺害してしまう。自分たちの置かれている状況をわかっているニーニはこう呟く―「この殺し、分からないでしょうね」「誰がだ」と『ネズミ捕り』が言った。「あの人たちですよ」(221頁)。父親の犯罪によって自分たちに降り懸かる不幸な将来を予知し、文明社会と自分たちの世界には大きな隔たりがあると認識している少年の諦観した言葉は、まさにカスティーリャ地方の状況を理解も改善もしようとししない当局に向けたデリーベスの言葉のように受け取れる。また作中における『ネズミ捕りおじさん』の「洞穴はオレのもんだ」「ネズミはオレのものだ」という叫びは、自由に思い通りの生活ができず、主張も通らないフランコ政権下の抑圧された民の声にも聞こえる。

このように主人公は文明社会とは対極的な生活を送っている父子だが、彼らを取り巻く環境すべて、つまり村人、土地に生息する動物、植物、天気という自然現象も本書の主人公であるといってよいだろう。物語は村の小麦の種まきの秋から始まり、収穫の夏で終わるという農作業の暦を軸にし、春夏秋冬を背景にした村の生活を中心に語られている。そしてこのカスティーリャ地方の厳しい自然とそれに翻弄されながら暮らす人々の現実を、デリーベスは詩的な表現で綴る。「わずかに二十四時間の間に寒暖計は、三十五度を超え、谷合いはしお垂れて、とろんとした眠りにおちていた」(320頁)。このように擬人化された厳しい自然の描写の裏には生まれ育った土地に対するデリーベスの深い愛が存在する。何作もデリーベス作品を翻訳されている訳者はこうしたデリーベス作品の独特の雰囲気をも損なうことなく訳出さ

れている。

他のデリーベス作品と同様、本書はアントニオ・ヒメネス＝リーコ監督によって映画化され、1997年にバリャドリッド国際映画祭で初上映された。この際デリーベスはノルテ・デ・カスティーリャ新聞にて、本書、およびカスティーリャ地方に対する並々ならぬ愛情と懸念について語った。その思いは、これより26年前に出版された『ミゲル・デリーベスとの会話』（1971年）の中でセサル・アロンソ・デ・ロス・リオスに語った思いと変わらない。このように作者の思いの詰まった、そして全作品の中でもっとも強いメッセージ性をもった本書は必読に値する。生涯にわたりカスティーリャ地方を愛し、小説の舞台とした偉大な作家デリーベスを永遠に失ったことは、スペイン文学に携わる者のみならず世界中の文学を愛する者にとって大きな損失であるといえよう。

（まるた・ちかこ 慶應義塾大学）

【学会報告1】

VII Congreso Internacional de la Asociación Asiática de Hispanistas

Paula Letelier.

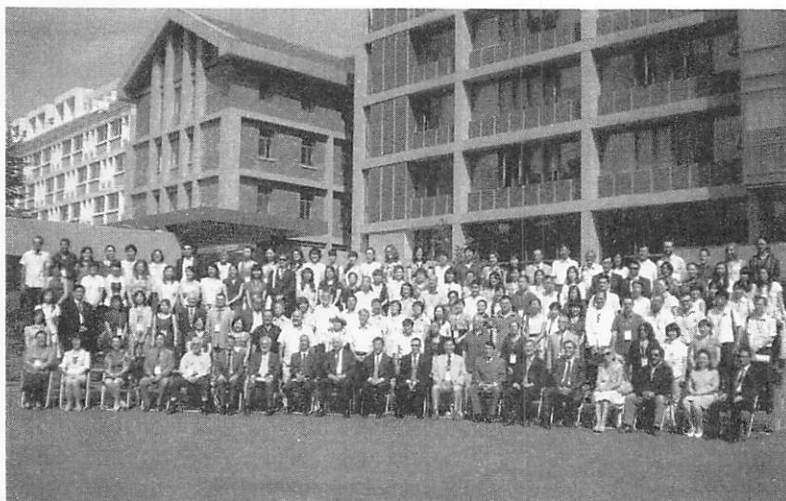
El VII Congreso Internacional de la Asociación Asiática de Hispanistas (AAH), tuvo lugar entre el 26 y el 28 de Agosto de 2010. La organización estuvo a cargo de la Universidad de Estudios Extranjeros de Beijing (BFSU), con un equipo dirigido por el Presidente de la Asociación, el profesor Dong Yansheng, y por el decano de la facultad de español, el Profesor Liu Jian, ayudados por profesores de la universidad y un grupo de eficientes y atentos estudiantes voluntarios.

Durante las dos jornadas y media que duró el congreso se presentaron un total de 132 trabajos, 15 de los cuales como ponencias plenarias, a cargo de ilustres hispanistas como Dong Yansheng (Presidente de la AAH y profesor del centro organizador), Francisco Moreno (Director Académico del Instituto Cervantes), Darío Villanueva (Secretario de la Real Academia de la Lengua), Lu Jingsheng (Universidad de Estudios Internacionales de Shanghai y Fundación Comillas), Antonio Briz (Universidad de Valencia), Raúl Ávila (Colegio de México), José Ramos (Universidad de Tamkang), Agustín Letelier (Universidad Católica de Chile) y Noritaka Fukushima (Universidad de Estudios Extranjeros de Kobe), entre otros.

El resto de las ponencias fueron distribuidas en 6 paneles paralelos: tres para lingüística y didáctica de ELE, uno para traducción y comunicación intercultural, uno para literatura hispánica y, uno de relaciones políticas y económicas entre Asia y el mundo hispánico. Claramente la temática que más interés presentó entre los ponentes fue la didáctica, lo que nos muestra cómo los desafíos que surgen a partir de nuestra labor docente se convierten en estimulantes investigaciones, entre los temas propuestos estuvieron la motivación en la sala de clase, el uso de Internet, el aprendizaje del léxico, el cómic en la clase de Ele, la ejercitación gramatical, entre otros, asuntos debatidos ampliamente según la realidad en la cual nos desempeñamos.

El Congreso contó con una amplia presencia de profesores de China, Corea, Filipinas, Japón, Taiwán y Tailandia. Se destaca la asistencia de 12 profesores de Japón, junto al profesor Fukushima encargado de una de las conferencias plenarias, se presentaron en los diferentes paneles, Daniel Arrieta, Mario Carranza, Mercedes Castro, Miyoshi Junnosuke, Paula Letelier, Yoshiharu Morimoto, Margarita Nakagawa, Raúl Nivón, Hiroto Ueda, Lluís Valls y Hiromi Yamamura. Creemos que para todos fue una excelente experiencia el encontrarnos con profesores de tantas universidades asiáticas, compartir nuestras dudas sobre el quehacer diario frente a las clases, aprender de las investigaciones y escuchar los aportes hacia nuestras ponencias.

En la Clausura del VII Congreso se anunció que la presidencia para los próximos 3 años estará a cargo del profesor Lu Jingsheng, de la Universidad de Estudios Internacionales de Shanghai (SISU), donde se celebrará el próximo congreso en el año 2013.
(Paula Letelier 関西外国語大学)



北京外国語大学キャンパスにて

【学会報告 2】

日本イスパニヤ学会における『ドン・ファン』劇評 (2009)

小阪 知弘

2009 年度日本イスパニヤ学界第 55 回大会の行事の一環として、10 月 10 日 (土) 静岡芸術劇場において、コロンビア人演出家、オマール・ポラス氏の演出の下、SPAC (静岡芸術センター) による『ドン・ファン』の舞台が上演された。

舞台は明暗のコントラストを基調に構成されており、舞台奥に広がる闇の中から各々の俳優が仮面をつけて舞台に登場する。登場人物の性格は仮面によって完全に記号化されており、それらは身振りやダンスと組み合わせられて独自の劇言語を構築していく。このようにコード化された身体言語によって表現される『ドン・ファン』の舞台が観客に提示するのは<イメージの裏切り>である。では、その<イメージの裏切り>とは何か？それは<パロディ>としての『ドン・ファン』である。舞台は終始一貫してアイロニーに満ちた<笑い>の空間と

して視覚的に構成されており、ポラス氏の演出は、色男の系譜としてのドン・フアンのイメージを転倒させ、パロディの修辞によって視覚に歪みを生じさせながら、我々観客を見事に裏切りとおしていく。



写真提供：(財) 静岡県舞台芸術センター - SPAC

圧巻であったのは二つの場面である。一つ目はドン・ゴンサロの石像がドン・フアンの家を訪問する場面。この場面は、天井からドン・ゴンサロの石像が舞台上に舞い降りてくるよう設定されており、言わば、垂直演出を媒介としてドン・ゴンサロの像が神のように顕現してくるよう、ポラス氏の計算によって仕組まれていたのだ。もう一つは、ドン・ゴンサロによってドン・フアンが業火に焼かれる場面。派手に演出されることが多いこの場面をポラス氏は敢えて抑制してオブラートに包むことによって、観客の想像力に喚起するよう演出していたのである。静けさの中、カーテン奥に透けて映し出されるドン・フアンの宙吊りの姿は、我々観客の心を恐怖と神秘の中へと引きずり込んでいったのである。

また、『ドン・フアン』の舞台を神話的な立場から振り返ってみると、そこにはドン・フアンの諸原型が様々な形で組み込まれていたことが確認できた。劇はティルソ・デ・モリーナの『ドン・フアン』風に始まり、中盤の歌劇的なアプローチはモーツァルトの『ドン・ジョヴァンニ』風に色づけされていた。そして、最後の場面はモリエールの『ドン・ジュアン』的に締めくくられていたのである。

このように、演出作法がフランス風にまとめられていたことは顕著であるが、一步後退して、鳥瞰的な視座から舞台を展望してみれば、その全体像として立ち現れてくるのはスペイン的な多様性であったということだ。俳優達の出・退場や場面転換を遠くから眺めていると、舞台空間はクルクルと万華鏡のように回転しながら異なる視覚を織り成していき、最終的にそれらは統合されてスペインの風土のように多面的な全体像を露にしたのである。

観劇後に行われたアフタートークも魅力的な内容であった。演出を指揮したポラス氏とスペイン黄金世紀演劇の研究者で、『ドン・フアン』に関する秀逸な諸論文で知られる同志社大学の稲本健二教授が中心となってトークは展開されていった。カルデロンの研究者として著名な古屋雄一郎先生が達意のスペイン語で観客とポラス氏との間を見事に繋ぎとめながらトークは和やかな雰囲気の中進められ、我々観客は舞台作りの内側と『ドン・フアン』の深層へと導かれていったのである。ここで特記しておきたいのは、アフタートークもまたポラス氏と稲本教授のコラボレーションによって舞台として演出されていたということである。具体的に言えば、ポラス氏が被っていた<黒色の中折れハット>と稲本教授が着けていた<赤色のネクタイ>がスペイン演劇を表象する視覚的記号として舞台上で輝いていたことであ

る。ミゲル・ミウラの『三つの山高帽子』(1932)を引き合いに出すまでもなく、山高帽子はサーカスや舞台を示唆する演劇記号であり、赤色という色彩は、＜スペインの情熱＞を表す色彩記号である。このようにして、＜黒色の中折れハット＞と＜赤色のネクタイ＞が静岡芸術劇場の舞台上で出会い、共鳴しあったことはシュルレアリスム的な偶然の出会いと見做すことも可能であり、日本イスパニヤ学会第55回大会に花を添える画期的な出来事となったのである。

(こさか・ともひろ 関西外国語大学)

【エッセイ1】

「たまプラーザ駅」考

山下 好孝

先日、羽田空港で横浜に向かうバスを待っているとき、「たまプラーザ駅前行き」というバスを見かけた。「たまプラーザ駅」とは、東京急行電鉄田園都市線の駅であり、「たまプラーザ」という駅名は、開業当時東急の社長であった五島昇の発案によるもののだそう。そして、「プラーザ」とは、スペイン語の plaza でももちろん「広場」を意味する。

しかし、ここで「たまプラーザ駅」という駅名はどのようなアクセント形式で発音されるのか疑問に思った。「たまプラーザ駅前行き」なら「たまプラーザ+駅前行き」のように二分され発音は容易に想像できる。しかし、「たまプラーザ駅」の場合、「たまプラーザえき」なのか「たまプラーザえき」なのか？(下線部は強勢を示す)

かつて私が初習外国語でスペイン語を学んだとき、スペイン語の強勢(アクセント)の重要性についてさんざん教え込まれた。plaza の場合、最初の a を含む音節に強勢があり、決して、プラサのように発音してはいけなくて何度も注意された。Madrid は最後の i を含む音節に強勢があり、マドリーのように発音しろと言われた。しかし、スペインのことをちょっと知っている日本人の中には「マドリ」と発音している人が多かったように記憶している。

後に日本語の強勢規則について学んだとき、特に地名、人名の発音の場合、後ろから三番目の拍(だいたい平仮名一文字に相当)に強勢を置くか、全く強勢を置かないいわゆる「平板型」のいずれかで発音することを知った。たとえば前者では「青森、秋田、富山、山口」などが、後者では「新潟、鳥取、大阪」などがその例である。スペイン語の場合は、後ろから二つ目の音節に強勢が置かれるケースが多いことは周知の事実である。

そのような日本語の音声的特徴から、スペイン語の plaza は「プラザ」と発音されやすいことになる。たとえば Sony Plaza など「ソニー・プラザ」という発音が普通であろう。

私が学生のころ、東京外国語大学スペイン語学科の教授でいらっしゃった原誠先生が、そのような日本人の「悪癖」を矯正するために、アクセントのある音節には日本語の長音符号「ー」をつけておられたのを思い出す。たとえば Chile は原誠先生風の表記をすれば「チーレ」となる。もしかしたら「たまプラーザ駅」というのも原先生の影響を受けているのかもしれない。

さて、「たまプラーザ駅」の発音に戻ろう。

これが「たまプラーザ」だけだったら、私も違和感を持つことはなかったであろう。ところが後ろに「～駅」というのが付くとどうしても変なのである。それは日本語では複合語になると強勢の位置が変わるからである。

「～駅」という要素が後部に付くと、前部の地名がいかなるものであっても「～駅」のひとつ手前に強勢が落ちる。「長崎(ながさき)→長崎駅(ながさきえき)」「東京(東京)→東

京駅（とうきょうえき）」のごとくである。東京駅の場合は、「～駅」の一つ手前の拍がいわゆる特殊拍（撥音、促音、長音）であるため、さらにもう一つ前の拍に強勢が移動している。そのようなメカニズムが働くのであれば「たまプラーザ駅」の発音は「たまプラーザえき」となる。もし、その発音が自然なら表記も「たまプラザ駅」のほうがふさわしいのではないか。

また、日本語の複合語で、後部要素が3拍もしくは4拍の場合、後部要素の第一拍に強勢が落ちるという規則もある。「北海道（ほっかいどう）＋大学→北海道大学（ほっかいどうだいがく）」のごとくである。すると上記の Sony Plaza も自然に「ソニー・プラザ」と発音され「ソニー・プラーザ」とするとかえって奇異な感じを与える。

私もかつてスペイン語をカタカナ表記することを考え、強勢のある音節に長音符号をつけることを試みたことがある。しかし México（メーヒコ）Colombia（コローンビア）などは違和感があってやめてしまった。スペイン語をカタカナ表記するのは、やっぱりやめたほうがいいのではないかというのが本稿の結論である。（やました・よしたか 北海道大学）

【エッセイ 2】

わがエルサルバドルの思い出—

インシンカ、サッカー戦争、ベネケ氏、そしてインスタントコーヒー

木越 勉

もう 15 年ほど前のことになる。あるロサンゼルス在住の米国人が、日本に遊びに来たので、私は会社の同僚たちと一緒に迎えた。その人は、10 代初めに米国に移住したのだと言う。「みなさんをご存知ないでしょうが、中米にエルサルバドルという小さな国がありまして、私はもともとそこの出身です。」

それを聞いて私は、エルサルバドルなら行ったことがあるから知っていると言ったのだが、にわかには信じ難いという様子だった。そこで私は証として、先ずエルサルバドル国歌を歌って聞かせた。続いて、Café Listo という同国にしかないインスタントコーヒーの CM ソングまで歌うと、そのエルサルバドル出身者の懐疑心は驚嘆と歓喜に変わった。

エルサルバドル共和国は確かに小国である。現在の人口 600 万。面積は 2 万 1040 平方キロ。九州の半分の大きさで、中米一小さい国である。

私は、この国のことを語れるほどよく知っているわけではないのだが、私個人にとって、この国は大きな意味を持つ。私が生まれて初めて訪れたスペイン語圏の国だからである。

1970 年夏、14 歳のとき、私は羽田からパナマのジャンボに乗ってサンフランシスコに 1 泊し、翌日タカ航空でグアテマラ経由エルサルバドルのイロパンゴ空港に到着した。そこで両親と弟に会い、1 か月間夏休みを過ごした。父はその 1 年前から、設立間もなかったインシンカ社という混紡織物の製造販売を行う日本との合弁企業に出向し、首都サンサルバドルに駐在していた。

当時のエルサルバドルは、中米一の工業国として発展しつつあったが、もともと農業が盛んで、コーヒーが主要な輸出産品であった。火山が多い地形が、コーヒー栽培に適しているらしい。イロパンゴ湖、コアテペケ湖といった火山湖があり、太平洋に面したラリベルタ海岸があり、風光明媚なところであった。ところが、奇妙なことに、国の要所要所に砲台があり、大砲が隣国ホンジュラスに向けられていた。

実は、前年の 1969 年 6 月にホンジュラスの首都テグシガルパで行われたサッカーのワールド

ドカップ予選で、エルサルバドルがホンジュラスに勝利したが、もともと国民感情が悪かった両国は、これを機に国交断絶し、戦争に発展した。これが世に言うサッカー戦争である。同年7月には停戦となるが、その後も停戦状態が続いていたのである。

エルサルバドルといえば、親日家であったワルテル・ベネケ (Walter Bénéke) 氏のことを忘れるわけにはいかない。在留日本人家族はみな、彼との親交が深かった。私が滞在中にも、1970年8月5日に行われた大阪万国博覧会のエルサルバドル・ナショナルデーの式典に、国の教育相として出席し帰国したばかりのところを、海岸にある彼の別荘に招待を受け、ランチを楽しませてもらった。ベネケ大臣は40歳で独身、とても気さくな人で、日本語も上手だった。駐日大使を経験して日本から多くを学びたいと考えた彼は、日本からの青年海外協力隊受け入れをいち早く決定し、私が滞在中も、多くの日本人隊員が同国で主として教育に携わっていて、私は国際協力の現場を目の当たりにした。

さて、時が下って、インシンカでは、1978年に日本人社長が誘拐され殺害されるという痛ましい事件が起きる。そしてベネケ氏は、内戦が勃発して間もなく1980年に暗殺されたという悲しい知らせを聞いた。内戦は12年間も続いて国は荒廃し、7万5000人もの犠牲者を出した。

私が1か月の夏休み滞在を経験したころは、今にして思えば古き良き時代であった。私は翌年1971年の夏休みに再度訪問して以来、エルサルバドルへは行く機会がない。しかし、父がこの国に転勤したために家族訪問をする機会がなければ、私がスペイン語に接する縁はおそらくなかっただろうと思うと、エルサルバドルはまさしく私の原点である。今でもこの国の思い出は、インスタントコーヒーのCMソングとともによみがえってくる。

ところで、私がCMソングを歌って聞かせた在米エルサルバドル人は、故郷にいる両親に私のことを話したらしい。すると、これを送ってあげなさいと言われたと、Café Listoを幾瓶も送ってくれた。エルサルバドルの家で毎日飲んでいたなつかしいコーヒーの味であった。

(きごし・つとむ 中京大学)

【エッセイ3】

いわゆる「講読」の授業について

中井 博康

第二外国語としてスペイン語を教えるようになって十年ほどになるが、いまだに自分の授業のスタイルというものが定まらず、毎年やり方を変えては試行錯誤している。特に頭を悩ませているのが、履修二年目の学生を対象とした「中級」あるいは「講読」と呼ばれる授業である。

当初はいわゆる訳読式の授業をやっていた。辞書をたよりにどんどん読む、それが外国語学習では当たり前だと思っていたからである。ところが、訳読式で教えるうちに、何か違和感のようなものを感じるようになった。スペイン語を教えているつもりでいたが、「訳をもう一度言ってください」という言葉に象徴されるように、学生たちの関心は日本語訳の方に向けられ、授業が日本語のディクテーションにしかなくなっていないことに気づいたのである。

スペイン語の習得に充てられるべき時間の大半が、日本語を筆記する作業に費やされ、一所懸命スペイン語を教えているつもりが、たいしてスペイン語の勉強にはなっていない事実には愕然とした私は、教え方について無自覚であったことを反省し、思い悩んだ末、講読の授業にもかかわらず、学生に和訳させるのをやめることにした。誤解がないように断っておく

と、私は訳読に絶対反対というわけではない。むしろ、繊細な言語感覚を養うためには極めて有効な教授法であるとさえ思っている。ただ、まだ基礎的な語彙すら十分ではなく、スペイン語のニュアンスが分からない段階においては、あまり効果的・効率的な方法とはいえないのではないかと、第二外国語としてスペイン語に一年ほど触れた程度の学生には、訳読より先にもっとやるべきことがあるのではないかと、考えるようになったのである。やるべきこととは、例えば、スペイン語自体を繰り返し聞き、何度も音読・暗唱をして、少しでも多くのフレーズを覚えるといったことであり、講読の授業ならば、テキストの「内容」だけでなく、その「内容を表現するスペイン語」を身につけさせるような活動を積極的に行うといったことである。

言うは易く、行うは難し。講読の授業といえば訳読式しか知らず、試験といえば「次の文章を訳しなさい」といった類いのものしか作ったことのなかった私は、それからというもの、第二言語習得論やテスト理論などの本を参考に、学生たちといちごっこを繰り返しながら、授業の改良に取り組むことになった。まず復習を徹底させるために小テストを毎回行い、授業中は学生をスペイン語の学習に集中させるため、以前は導入をためらっていたペアワークを活動の中心に据えた。ペアワークのための副教材として、テキストの内容に関する質問や正誤問題、キーワードの説明などをすべてスペイン語で準備するようになった。試験の出題形式も、西文和訳はやめて、日本語訳を覚えれば足りるようなものではなく、テキストの内容や論理を理解するとともに、スペイン語の表現をきちんと覚えていなければ解答できないようなものに変えた。

授業の準備は格段に面倒になったが、苦勞のかいあって、以前より学生たちの意識はスペイン語自体に向けられるようになったと思う。居眠りや内職をする学生もいなくなり、授業に活気がでてきたようにも感じる。めでたしめでたしと言いたいところだが、正直に告白すれば、自分はいったい何をしているのかと虚しくなることもある。学生たちには申し訳ないが、何かが違うのではないかという違和感は今なお拭えずにいる。

(なかい・ひろやす 津田塾大学)

【エッセイ 4】

「M・デ・ウナムーノとの出会い」

齋藤 康子

ウナムーノと初めて出会ったのは、私がスペイン語学科の学生の頃、いつも帰宅途中に立ち寄り池袋の本屋の店頭で雑誌の立ち読みをしていた時であった。それまでウナムーノについてぼんやりとした知識しか持っていなかったが、こんなにも自分と同じように自己の死に苦悩している人間がいるのかという激しい感動で我を忘れた。「この人を生涯追い続けるかもしれない」と、私はこのとき直感した。ウナムーノがかつて自分とよく似ているキルケゴールのことを「我が兄弟よ!」と呼んだことは有名であるが、その私の思いは理屈抜きで「ただ共に在りたい!」ということであった。

あれから44年が過ぎてしまったが、この歳月は一瞬であり、ウナムーノ流の表現をするなら〈algo fugitivo y etéreo〉であった。そして、困難に挫けそうになりウナムーノから離れようとした時、いつもあの時の衝撃が思い起こされた。

3年前、サラマンカ大学の論文集〈Cuadernos de la Cátedra MIGUEL DE UNAMUNO〉に『La existencia humana en Miguel de Unamuno y Tetsuro Watsuji』を提出し、やつ

と昨年末に出版された。私はウナムーノの研究を終了する前にどうしても自分の作品をあの資料館に残しておきたかった。

それは、2002年に3カ月間ウナムーノの資料館に通っていた頃から日々自分のなかで膨らんできた想いであり、自分がどのような思索をしたかということよりも、何よりもウナムーノが生涯書き記した作品が詰まっているあの場所に自分を置きたいという願望であった。今後何年か何百年か判らないが、長い時間の流れの中で、彼の魂が感じられるあの蔵書のなかに自分の作品を置くことが出来たらこの上ない喜びであると思ったからだ。

旧サランカ大学文学部の隣にある大学所有のウナムーノ資料館は、彼が学長及び副学長職時代のあわせて16年あまりを過ごした建物でもある。昼間は観光客の歓声で賑わうリブレロス通りに面した資料館の古い木の扉は、下界の全てを遮断するかのように重厚で常に鍵が掛けられている。毎朝9時半に私が入口のブザーを鳴らすと、決まって「誰ですか?」というそっけない返事が聞こえてくるが、そのブザーも私の身長では届かない。通りから石段をひとつ上がり背伸びしてようやく押すことが出来る。始めてここを訪れた時、私はまるで自分が拒絶されているかのような錯覚に襲われた。しかし、重い扉を押して薄暗い部屋からすぐに上階へと続く螺旋状の石段を登っていくと、正面の壁に掛けられた黒のフロックコートを着たウナムーノの写真がそんな私の感傷を吹き飛ばしてくれた。多くの人が歩いたために真ん中がへこんでしまった石の階段を踏みしめながら、「ウナムーノも日に幾度となくこの上を歩いたにちがいない」と想像しただけで私の心は弾んだ。

現在2階はウナムーノの愛用した遺品が置かれた展示室と資料館を運営するスタッフの事務室が置かれている。さらに3階が開架式の図書室と資料室になっている。よく疲れると私は南側の独房のような小窓から入って来る光のなかで、木の床に腰をおろし書架から本をとって読んだ。この場所は、建物の最上階にあるために隅の天井が斜めに低くなっている。そのために大人では立つことはできないこの場所は、子供のころから隅っこが好きだった私には心地良い空間であった。

7年半の不在の後、1921年にウナムーノは副学長としてこの宿舎に戻ったが、再び床を踏みしめたときの感慨を、翌年『二百年のハエ』というタイトルで綴っている。彼が生活をし、思索をし、このエッセーを書いた建物の石段を上がり下りしながら、又研究者の邪魔にならないようにと軋むドアを静かに開閉しながら、私はウナムーノのことをわが身に感じる。彼の友であり、フランス人の文学者ジャン・カスーは「もし、永続し永遠不滅のためでないなら、この世の好機は何のために偶発的な出来事であるウナムーノを生み出したのであろうか?」と述べている。

私はこの資料館の床で本を手にししながら、自分にとっての好機は「ウナムーノと出会ったことかもしれない」と思った。旧大学とカテドラルの間にあるこの建物は、今でも15分毎に鐘の音が聞こえてくる。この温かくゆったりとした鐘の音に包みこまれながらウナムーノと永遠にここに居ることのできる私の魂は、たとえようもなく幸せである。

(さいとう・やすこ 法政大学)

【エッセイ 5】

東京スペイン語学研究会の活動にみるスペイン語学研究動向

西村 君代

本稿では、東京スペイン語学研究会の近年の活動についての報告を行いたい。2003 年に東京で勤務を始めたのを機に本研究会に加わり、それ以来、毎月最終土曜日に開催される（東京外国語大学を会場にすることが（多い）研究会にはほとんど出席してきたので、一會員の目でこれまでの活動記録と、研究動向の一端をご報告したい。

東京スペイン語学研究会（Círculo de Estudios Lingüísticos Hispánicos de Tokio）は、35 年の歴史をもつ（1975 年発足）スペイン語学の研究会である。月例研究会は毎回 15 名～25 名の出席者数を保っているが、その登録会員数は 90 名に上るようである。今年で 25 号を数える会誌『スペイン語学研究』（Estudios Lingüísticos Hispánicos）では、研究会で発表された研究成果を中心に、スペイン語学に関する論文が日本語、スペイン語で発表されている。日本におけるスペイン語学研究的中心的研究会の一つであるといえるだろう。また、関西スペイン語学研究会と合同で毎夏開催される研修合宿 SELE（Seminario de Lingüística Española）も重要な年間行事であり、全国から 40～50 人が集まる貴重な議論の場である（『会報』第 3 号に関連記事）。

月例研究会では、院生から研究歴の長いベテランまで分け隔てなく、毎回 1 名の會員が自らの研究テーマについて 2 時間かけて発表を行うのであるが、発表の途中であつても参加者がコメントや質問を遠慮なく挟むことができる、適度な緊張感とともにアットホームな雰囲気溢れる会である。学会などでの 20 分の発表では意を尽くせない内容を、時間をかけて説明し、指摘やコメントを受ける。そして、さらなる研究の意欲がかきたてられるのである。

稿末の表は、直近約 3 年分（2008 年 1 月～2010 年 7 月）の研究発表テーマ（29 本）を分野別にまとめたものである。興味深いのは、外国語としてスペイン語を学ぶわれわれ日本人が困難を感じるテーマに取り組む傾向がみられることである。非母語話者の視点が新しい知見をもたらすことができるというのは、これまで積み重ねられてきた多くの実績からも明らかである。また、さまざまな言語理論、アプローチなどに表れる研究の多様性は刺激の宝庫であり、学ぶことは尽きない。

近年のもう一つの傾向は、やはりスペイン語教育であろう。會員の多くが教室で抱く問題意識を研究の出発点とすることが多い。言語学的知見からのスペイン語教育への貢献と、スペイン語教育を実践する中からの言語学的問題提起は実りある循環を生み出しているといえよう。

本研究会が活力を維持し発展を続けることは、日本、そして世界におけるスペイン語学研究に寄与することに他ならない。會員の一人として、改めて身が引き締まる思いである。

（にしむら・きみよ 上智大学）

（研究会 HP :

http://www2.dokkyo.ac.jp/~rese0007/dong_jingsupein_yu_xue_yan_jiu_hui/base.html）

名詞句 (冠詞・数・形容詞など)	・「形容詞の位置」 ・「名詞句内の形容詞の位置」 ・「“Los ómnibuses”：＜弱勢母音＋s＞で終わる名詞の予期しない複数形」 ・「単数形の表すもの(3) 定冠詞つき名詞句」 ・“<i>Aguas, miedos, vacaciones y deberes. Las funciones del morfema plural en los sintagmas nominales</i>” ・「単数形の表すもの(2)ーロール概念の導入ー」
再帰文	・「estarse における se の考察」 ・「使役的な解釈が可能な再帰文」
動詞・構文	・「ser 受動文の形成ーアスペクトと意味ー」 ・「gustar 型動詞を含む文における語順に関するー考察ーgustar と interesar について」 ・「状態述語とダイナミズム：estar 動詞をめぐって」 ・「叙述補語研究の方向性」 ・“Tres usos especiales del gerundio”
時制・法	・「分岐的時間のスペイン語法時制体系への導入についてーcantaba, cantaría 形を中心に」 ・「主節が命令文の場合における従属動詞の法選択について」 ・「スペイン語動詞体系における多義性について」
スペイン語教育	・“Los textos periodísticos como modelo de lengua para la enseñanza del español coloquial” ・「教育の観点から考える ser, estar」 ・「初級教材における語彙提示に関するー考察ーコロケーションの視点から」 ・“Aproximación a la interlengua del español de universitarios japoneses de nivel intermedio” ・「スペイン語初級教材における文法項目と機能項目の接点ーpoder と querer を用いた 2 人称疑問文の場合ー」
スペイン語史	・「Poema de Mio Cid における関係代名詞の用法」 ・中世、黄金世紀スペイン語の『前置詞＋無強勢代名詞＋不定詞』に関するー考察
語形成	・「強勢母音で終わる語の縮小辞付加と接間辞」 ・「縮小辞-ito による派生について」
言語変異・言語政策	・“El multilingüismo como un medio para la promoción de la paz: El caso de Guatemala” ・「現代スペイン語の統語バリエーションースペイン 9 都市とラテンアメリカ 5 都市の調査結果からー」
疑問詞	・“Qué tal / qué tanto”
語彙	・“Análisis sociolingüístico del vocabulario de la prensa de Lima”

【自著紹介1】

『ウルトライスモ — マドリードの前衛文学運動』

坂田 幸子

ウルトライスモは、1920 年前後にスペインで起きた詩を中心とする前衛文学運動だ。この運動自体からは優れた作品を生み出すことができなかったこともあって、文学史では小さな扱いしかされていない。20 年近く前にウルトライスモと出会って以来、幾度も中断し、投げ出しかけたりした末、ようやく 2010 年 2 月に本を出すことできた。とはいっても、自分としてはウルトライスモの研究者よりもむしろファンという意識でいる。たとえば、路上ライブをやっているようなマイナーなバンドに惹かれ、その作品やメンバーについて知ってもらいたい一心で勝手にファンサイトを立ち上げた、というところだろうか。

拙著を書くにあたっては、研究書としての体裁を備えつつも、一般の文学好き、スペイン好きの方にも楽しんで読んでもらえるものにしたいと考えた。具体的な構成としては、ウルトライスモ前史から始め（第 1 章）、文芸誌など、同時代の様々な資料から運動の誕生と進展をたどり（第 2, 3 章）、テーマと技法の両面から作品分析を行った（第 4, 5 章）。残りの章ではウルトライスモと関連づけながら、モダン都市マドリードの街並みや（第 6 章）、女性アーティストたち（第 7 章）、アルゼンチンとメキシコの前衛文学運動（第 7 章）について紹介し、末尾に人名小辞典を付した。また、作品を多く訳出して、アンソロジー的な側面も持たせるようにした。だが、詩を訳すのは難しい。特にウルトライスモの場合、句や行を図形的に配置した視覚詩が多くあるが、これを訳した場合、はたして十分に魅力が伝わるだろうか。たとえば単純な例として、海をうたった作品で詩行が左詰めと右詰めに交互に配置されていると、それは寄せては返す波を視覚的なイメージとして伝える。しかし縦書きの日本語にして、詩行を交互にページの下上に配置しても、波を連想させる形にはならないのだ。

執筆中は、気力・体力・知力の欠如を思い知らされた。前後左右の文脈 — スペイン語詩の流れや、他国の同時代文学など — についてもっと本を読まなければならないし、歴史的・社会的背景についても詰めが甘かったと反省している。逆にささやかな自負としては、できるだけ多くの一次資料にあたって書いたということだ。編集者をはじめとする方たちのお陰で、洒落た装幀の本になったし、図版も多数、収録できた。ホルヘ・ルイス・ボルヘスの妹である画家ノラ・ボルヘスについて紹介できたのも嬉しい。

2010 年 3 月にマドリードを訪れた際、ファンとしては、どこかゆかりの場所を訪ねて、亡き詩人たちに心の中で出版報告をしたいと考えた。だが、そうした建造物はほとんど現存しない。詩人たちにとってモダニティの象徴であった鉄の陸橋は 1930 年代に架け替えられてしまったし、この運動の領袖たるカンシーノス・アセンスが住んでいた家は内戦中に破壊されてしまった。どうしたものか……もしやと思い、ペドロ・ガルフィアスが住んでいた場所を探すことにした。彼はウルトライスモの誕生当時、まだ 10 代の大学生だったが、この運動を代表する詩人として活躍する。やがてスペイン内戦で共和国支援のために奔走し、内戦後はメキシコに亡命して、病苦と闘い苦難の生涯を送るのだ。さて、地図を片手に探しあてた場所は、マヨール広場から南に下っていった旧市街の路地である。そこにある小さな集合住宅の建物をよく見ると、入口扉に 1866 年と刻まれている。ガルフィアスが住んだ家は残っていたのだ！ 彼は地方出身の学生の常として、最上階の一室を借りていた。そこには一時期、ウルトライスモの雑誌『グレシア』の編集部が置かれたこともある。また彼がその部屋で編集した雑誌『オリソンテ』では、ラファエル・アルベルティが詩人として第一歩を踏み出し

た。見上げればその建物は、質素ながらも手入れが行き届き、各戸の窓はささやかな鉢植えで飾られている。その昔、若き詩人がスペイン詩を刷新するのだという志を抱いて過ごした建物は、一世紀近い時の流れを経て、春の昼下がりの陽射しの中、静かなたたずまいを見せていた。

(さかた・さちこ 慶応義塾大学)

【自著紹介2】

Castilla y el mundo feudal. Homenaje al profesor Julio Valdeón, I-III vols.,
Universidad de Valladolid, 2009.

大原 志麻

本書は、2009年6月21日に亡くなったスペインの高名な中世史研究者フリオ・バルデオン・バルルーケ教授の記念論集である。2007年企画された本書は、奇しくもその死の同年刊行された。全三巻、総ページ数2073頁と、おそらくこれまで刊行された記念論集の中では、最も大部なものの一つであろう。1970年以降、常に革新的な知識人として、歴史学を牽引してきたバルデオンに対する評価の表れである。

周知の通り、フランコ末期のスペインの学生には、話していいことと話すことができないことがあった。大学関係者は、学問的な主要テーマの多く、スペイン内戦、スペイン共和国、カトリック両王などについて語ることが禁じられ、学問的に大きな制限の中で、史実が覆い隠されてしまっている閉塞感を感じていた。マルクス主義に関連していると目された者には最低の成績がつけられ、植民地独立について言及すれば落第させられた。そのような「政治的に正しい」フランコ体制下の学問的姿勢に対して、70年代の10年間に、アウタルキー体制の破壊が試みられた。

この時期、大学に新風を吹き込んだのがフリオ・バルデオンである。待望の若手教員としてバリャドリッド大学に赴任してきたバルデオンは、30年代から存在していたにもかかわらず、当時のスペインにとっては最新の方法論であった、ヨーロッパのアナール学派と唯物史観を導入し、トラスタマラ内戦そして階級闘争についての論考を発表した。

以後革新的な研究を続け、三宗教のあり方に特別な関心を払いつつ、民衆文化、社会史、全体史、マンタリテなど実に幅広い研究を行った。それゆえバルデオン個人の研究の流れを追うことは、そのままスペインにおける研究の方法論の変遷を理解することでもあるといえる。その海を越えた研究活動と名声により、本書の執筆者はスペイン国内に留まらず、実に多岐にわたる研究が収められている。

第一巻は三部に分かれ、第一部では、バリャドリッド大学の錚々たる同僚諸氏により、熱のこもった筆で、その研究の越し方と歴史方法論の変遷が詳述され、さらに歴史資料をめぐる議論及び女性史、法制史、考古学、歴史教育またメキシコにおける歴史認識についての論考が集められている。第二部では領主と所領について、第三部では都市社会と商業についての論文が続く。第二巻に収められた第四部では、バルデオンの主要テーマであるキリスト教徒、イスラム教徒、ユダヤ教徒の境界とその文化的遺産について、第五部では、スペイン諸王国と王権の道具立てについての論考が収められ、評者も末席を汚させてもらっている。第三巻収録の第六部では、中世後期の危機という大きなテーマと、バルデオンの研究テーマの柱の一つである社会抗争について、そして第七部は文化、心性そして日常生活をテーマとする数々の論文で締めくくられている。

敬慕するバルデオンの研究に結びつける形で、歴史研究のあらゆる分野の第一線の研究者

がその最新研究を寄せた本書は、スペインの中世史研究の越し方と現状を改めて我々に俯瞰させてくれる。亡師の冥福を祈ると共に、この大部の記念論集をきっかけとしたさらなるスペイン中世史研究の発展を期待したい。

(おおはら・しま 静岡大学)

【自著紹介3】

訳者のとまどい ロベルト・ボラーニョ『野生の探偵たち』

柳原孝敦、松本健二訳（白水社、2010）

柳原 孝敦

私はボラーニョや『野生の探偵たち』の面白みを十全に表す語をまだ見出せないでいる。

なるほど、その価値を文学理論や批評の用語をちりばめながらもっともらしく語ることは出来るだろう。『野生の探偵たち』の翻訳者（松本健二との共訳）として小説の3分の2ばかりを訳し、「あとがき」も書いた私は、その「あとがき」にそれらしいことを書いたはずだ。大学院の授業ではここ数年、連続してボラーニョの他の作品を読んでいる。『野生の探偵たち』のみならず、広くボラーニョの特徴というのもつかんでいるはずだ。でも彼がなぜこんなに面白いのか、それがうまく説明できないのだ。

「はらわたリアリズム」という前衛詩の運動の中心人物の足跡を、第1部と第3部ではその仲間になった17歳の少年の日記を通じて、第2部では50余名にもものぼる関係者の証言を通じて辿るというただそれだけの筋の小説が、なぜこんなに面白いのだろうか？

私自身は映画における擬似ドキュメンタリーの手法との比較で価値づけてみた（「あとがき」）。野谷文昭さん（『日経新聞』書評）は二人の詩人の「危険で魅力的な旅の切なさ」と豊穡さにため息が出る」と評された。沼野充義さん（『毎日新聞』書評）は「貧血気味の現代文学への強烈なカンフル剤、いやちよとした爆弾くらの効果はある」と評価してくださった。都甲幸治さん（『読売新聞』書評）は「革命や詩に憧れながらも、革命家にも詩人にもなれなかったすべての人にも本作は捧げられている。それでもいいじゃないか。あのころの友情や夢は本物だったんだから」としてノスタルジーに訴えかける面白さだと言う。越川芳明さん（『図書新聞』書評）は「移民が常態と化し、国境がゆらぐ21世紀の現状を扱うこれからの若い日本の作家たちが目指さねばならない作品である」とグローバル化時代に対応するアクチュアリティに面白さを求めている。おそらく、こうした評価はどれも正しい。どれも正しいと言えるだけの豊かさがこの小説の強みには違いない。でもやはりそれだけでは、陣野俊史さん（『週間金曜日』書評）の「なんだろう、これ」という素っ頓狂な驚きの声に応えることができない。

私自身もこの小説を訳しながら、常に思っていた。なんだろう、これ。なんでこんなに面白いんだろう？ わからない。でも、私が面白いと思う箇所は、いくらでも示すことができる。たとえば、次のような一節だ。

うつむきながらの作業で目は少しばかりかすんでいたな、チリ人は書斎の中を静かに歩き回っていて、私はただ彼の人差し指と小指の音だけを聞いていたんだが、やれやれ、たいそう器用な奴でね、私の分厚い本の背をさっと指で撫でていくんだが、肉と革、肉と紙の擦れる音がして、これがまた耳に心地よくて、夢を見るのにちょうどいい、きっと私も夢見る態勢になったに違いない、というのも、いつの間にか目を閉じた（その前から閉じていたのかもしれない）と思ったら、サント・ドミンゴ広場とそのアーケー

ドが目には浮かんだからだ、……（上巻 340 ページ）

第2部のキーとなる人物アマデオ・サルバティエラが、「チリ人」ことアルトゥーロ・ベラーノ（小説全体の中心となる詩人）の来訪時の話をしている箇所だが、ここでアマデオは嬉しい酒を飲んで寝てしまい、昔の思い出を夢に見たと言っている。その夢の世界への下降のしかたが甘美だし、この後に展開される夢の内容も素晴らしい。でも何と言っても私が面白いと思うのは、（ ）内の一文だ。「その前から閉じていたかもしれない」。ただでさえ不確かな夢の話が、その夢さえ見たかどうか不確かだと、いったいいつから目を閉じていたのかわからないと、はぐらかされることになるのだからだ。

こうしたはぐらかしが、ボラーニョを読む楽しみの最大のもののひとつだと思う。しかし私はこれを何と呼べばいいのか、知らずにいるのだ。

（やなぎはら・たかあつ 東京外国語大学）

【書評1】

アンヘル・エステバン、ステファニー・パニチェリ

『絆と権力 ガルシア＝マルケスとカストロ』（野谷文昭訳、新潮社、2010年）

石井 登

本書は2004年に出版された *Gabo y Fidel : El paisaje de una amistad* の全訳である。筆者の手元にはコロンビアで印刷された原書があるが、その表紙では普段着のガブリエル・ガルシア＝マルケスとフィデル・カストロが肩を組んで微笑む写真が使われており、本書の表紙に用いられている、いつもの軍服姿のフィデルとは若干印象が異なっている。諸々の事情によりこの写真になったそうであるが、「権力」という言葉を使ったタイトルの変更によって、そのイメージを反映しているようにも思われる。

文学者と権力の結びつきについては、実は長い歴史がある。ロベルト・ゴンサレス＝エチエバリア等が指摘している通り、スペイン語圏の文学におけるその伝統はスペインの『エル・シッド』時代にすでに始まっているとされ、ラテンアメリカにおいても、アルゼンチンのサルミエントとロサス、ニカラグアのルベン・ダリオと中米の圧政者たちとの関係などがよく知られている。本書で扱われているガボとパナマのトリホスやフィデルとの関係もまた、大枠から眺めるなら、*Señor y vasallo* あるいはパトロン＝クライアント関係を見出すことができるのかもしれない。しかしながら、恐らくそのような読みだけでは本書を味わうことはできないだろう。これは「光と影に満ちたひとつの友情」（2頁）の書なのである。

本書では、ジョイスあるいはカブレラ＝インファンテ的造語などは特に見られないものの、押韻による言葉遊びや比喻などが多用されている点では異色であり、キューバの文学のイメージを彷彿させるような文学的表現が訳者の野谷文昭先生によって巧みに訳出されている。そのため文章自体も読む者を飽きさせない。また本書では、＜パディーリャ事件＞の全貌（第一部）や、ガボがトリホス將軍らと共に米国のカーター大統領との交渉へ向かう話（第二部）、ノーベル賞受賞の驚くべき裏話（第二部）など、その新旧大陸を跨いだスケールの大きさと情報量に圧倒されてしまうが、注意深く読んでみると、出来事や発言が時系列に沿わず、めまぐるしく前後していることに気づく。このことは読む者に一種の混乱を引き起こすが、これは、善悪の判断は抜きにして、「友情」の名の下に、ガボのカストロとキューバへの姿勢が一貫していることを示しているといえよう。それゆえに本書で描かれる諸々の出来事と数々

の発言が時間を越えて繋がっていくことになる。

著者たちが「きわめて文学的で文化的な」雑誌『プレイボーイ』でのガボへのインタビューを採る部分（第二部）など笑いを誘うところもあるが、本書が痛烈な批判の書であることは間違いない。それは例えば「パディーリャ事件」（第一部）に対するガボの関わり方や「エリアン事件」（第三部）でのガボによる記事への有無を言わせぬような批判など、全編を通して読み取ることができる。しかし、本書がガボやカストロ、そしてキューバの体制を批判するために書かれた数多の書物と同じかといえば、きっとそれは違うだろう。本書の二人の著者が、キューバ文学の研究者であり、ガルシア＝マルケスの作品を愛読しているとするならば、恐らくそこには何か自らの研究対象に対する愛情や尊敬のようなものが存在しているのではないと思われる。野谷先生も「ガルシア＝マルケスの作品を高く評価しているのは明らかである」（348 頁）、「カストロについての記述にしても、根底では彼の魅力を認めているところが端々に現れている」（同）と本書の解説で触れている通りである。

本書の著者たちは、カストロ支持か、反対か？ というような「常にいかなるニュアンスも入り込む余地のない論法」（73 頁）や、「ニュアンスを欠いたマニ教的二分法」（315 頁）をも「矮小化」として批判している。つまり、本書がキューバに関連する問題を扱いながらも、この二分法では捉えきれないものであることを宣言しているともいえよう。少々不謹慎かもしれないが、キューバの体制の犠牲者たちや、決別していった知識人たちの問題の是非を問う以前に、ガボとフィデルによる「絆と権力」のドラマへの、ある種の感動を覚えずにはいられない。

（いしい・のぼる 東京大学大学院博士課程）

【新刊紹介】

2010 年 1 月

ディエゴ・オルティス『オルティス変奏論—16 世紀ディミニュション技法の手引書』平尾雅子訳・解説、濱田滋郎監修、アルテスパブリッシング

日本カミーノ・デ・サンティアゴ友の会『聖地サンティアゴ巡礼—世界遺産を歩く旅』ダイヤモンド社

ラウラ・レストレーボ、松本楚子訳『サヨナラー自ら娼婦となった少女 ラウラ・レストレーボ』現代企画室

2 月

大貫良夫ほか編『古代アンデス神殿から始まる文明』朝日新聞出版

坂田幸子『ウルトラリスモ』国書刊行会

マリオ・バルガス・ジョサ、寺尾隆吉訳『嘘から出たまこと』現代企画室

3 月

アラロンほか『スペイン短編逍遙』中山直次訳注、大学書林

石橋 純『中南米の音楽』東京堂出版

杉山茂樹『バルサ対マン U』光文社新書

利倉 隆『ゴヤ 闇との対話』二玄社

中畑貴雄『メキシコ経済の基礎知識』ジェトロ

ハースト・ブランドン、奥めぐみ訳『オールアバウト ペネロペ・クルス』AC Books

セサル・フラガ著、池田宗弘画『フラガ神父の料理帳：スペイン家庭の味』ドン・ボスコ社

松下 洸『現代メキシコの国家と政治』御茶ノ水書房

水崎野里子『虹の架け橋：日英スペイン対訳現代詩人アンソロジー』北溟社
村松尚登『スペイン代表「美しく勝つ」サッカーのすべてー“無敵艦隊”の強さを徹底分析！』
河出書房新社

-----, 『スペイン人はなぜ小さいのにサッカーが強いのかー日本がワールドカップ
で勝つためのヒント』ソフトバンククリエイティブ

松村和明『ダリをめぐる不思議な旅』ラピュータブックス

桜井三枝子『グローバル化時代を生きたマヤの人々』明石書店。

4月

アドルフォ・ビオイ・カサレス『メモリアスーある幻想小説家の、リアルな肖像ー』現代企
画社

寺崎英樹、エンリケ・コントレーラス編『デイリーコンサイス西和・和西辞典』三省堂。

ロベルト・ボラーニョ著、柳原孝敦・松本健二訳『野生の探偵（上・下）』白水社。

湯浅健二『サッカー戦術の仕組み』池田書店。

エリサ・ラモン著、ロサ・オスナ画、星アキラ訳『いつでもそばにいてね』ひさかたチャイ
ルド。

渡部森哉『インカ帝国の成立』春風社。

マリア・ロペス＝ソリア著、宇野和美訳『おじいちゃんとケーキをつくろう』日本標準。

5月

阿部修二『銀街道紀行』未知谷。

伊高浩昭『ラ米取材帖』ラティーナ。

小澤一朗『スペインサッカーの神髄』白夜書房。

近藤健児『辺境・周辺のクラシック音楽Ⅰ イベリア・ベネルクス篇』青弓社。

榎本和以智『男と女のスペイン語会話術-学校では教えてくれない！』TLS 出版社

Nichiza 日本法研究班、日本スペイン法研究班、Universidad de Zaragoza、Facultad de
Derecho 編『現代スペイン法入門』嵯峨野書院

吉田正三朗『蕎麦屋でスペイン・バル：スペイン長期滞在事典』文芸社

芝崎みゆき『古代マヤ・アステカ不思議大全』草思社。

中島聡子『スペイン語リスニング』三修社。

藤坂ガルシア千鶴『マラドーナ 新たな闘いーアルゼンチン代表、ワールドカップ予選 345
日の軌跡ー』

6月

豊田有恒『世界史の中の石見銀山』祥伝社。

ハーベイ・カーケリング『巡礼コメディ旅日記』みすず書房。

ヘスス・マロト、粕谷てる子『スペイン語で読むやさしいドン・キホーテ』日本放送出版協会

柳原孝敦『映画に学ぶスペイン語-台詞のある風景』東洋書店

漢那朝子『ミ・ファミリア』ノラ・コミュニケーションズ。

細野昭雄・田中 高編著『エルサルバドルを知るための55章』明石書店。

フェルナンド・トーレス著、野間けい子訳『神に選ばれしストライカー』講談社

7月

磯山久美子『断髪する女たちー一九二〇年代のスペイン社会とモダンガール』新宿書房

エスピノーサ、三原幸久編訳『エスピノーサ スペイン民話集』岩波書店

秦真紀子『旅するバルセロナ-光と影の国、スペイン極上の旅案内』翔泳社
前田貞博『貿易実務のスペイン語-ビジネスメール例文集』白水社
竹中克行・斉藤由香『スペインワイン産業の地域資源論』ナカニシ出版。

8月

鈴木かほる『徳川家康のスペイン外交-向井将監と三浦按針』新人物往来社
三好準之助『南北アメリカ・スペイン語』大学書林。

神代 修『キューバ史研究-先住民社会から社会主義研究まで』

岡部明子『バルセロナ-地中海都市の歴史と文化』中公新書、中央公論新社。

9月

トビー・グリーン著、小林朋則訳『異端審問-大国スペインを蝕んだ恐慌支配』中央公論新社
芝 紘子『地中海世界の<名誉>観念-スペイン文化の一断面』岩波書店。

【編集後記】

『会報』17号をお届けいたします。16号の刊行から約8ヶ月が経過しての刊行です。予想以上に刊行が遅れたのは、いろんな理由がありますが、原稿の集まりがよくなかったのが最大の理由です。早くから原稿をお送りいただいていた方には大変ご迷惑をおかけしました。この場を借りてお詫びを申します。

学会は年1回の全国大会開催と年1回の学会誌 HISPANICA 刊行が二本柱ですが、これだけでは物足りません。そこで始まったのが『会報』の刊行です。会員から寄せられる巻頭言、エッセー、本の紹介（自著紹介、書評、新刊紹介）、それに世界の学会情報が内容のほぼすべてですが、『会報』の内容がこれでいいのかと、時々、悩んでおります。この悩みを解決していただける名案がありましたら、遠慮なくご連絡ください。お待ちしております。

なお、小阪知弘「日本イスパニア学会における『ドン・フアン』劇評（2009）」の原稿はすでに16号に掲載しましたが、写真提供者名を入れるのを忘れておりましたので、ここに改めて掲載させていただきます。
(広報担当理事：坂東省次)